

東教大文学部ついに折れる

学長直轄で授業再開

検問協力など四項目のむ

東京教育大学文学部は、六月年度の教授会、先着検問協力から求められていた授業再開のための四条件（四項目）をのみ、学長直轄による授業再開に協力することを決めた。紛争発生以来、この間に検問と対立、ことに入構制限・検問については「学生の人権を侵すもの」と強く反対してきた文学部も、大法の重圧下では全面降伏せざるを得なかった。この結果、文学部側は一日から行なっていた自主退室による一部授業は「前夜」されることになる。重圧課は回避された。（18面に関連記事）



宮島学長代行

学長代行側が出した四項目は、検問には全教員が協力するかの三十八項目の授業を認めめるかの学内秩序維持は学長代行の判断にまかすかの文学部がこれまで出した大文学部執行部批判のうら不穏態度を分けて正するか、というもので、四つを一括して、イエスかノー

「と答えずというもの。

このため文学部教授会は昨夜まで激論をなしたが、結局「ともかく授業をした」という意向が大勢を占め、四項目の二、三日の協議会で決まった学長直轄による授業再開を認めることとして同意することを決定した。この結果、文学部が一日からの教授会決定によって一部授業をしていく授業計画は、折去（撤回）はしないが、なかつたことにする」となった。期間、学生をほったらかしに、一ヶ月ほどにわたり主権抗争

いをしてきた文学部授業再開問題は文学部教授会の、全面無条件降伏となった。文学部執行部は二年過ぎの慣年、入試中止を避けるには、これしかなかったと苦悩を語るが、紛争発生以来、大文学部のやり方を批判し、機動隊や検問方式による授業について抗議行動をとってきたことでの姿勢との間の矛盾は明らかとならない。若手教育の中には「大法の学部の立場におおびく教授会のカリキュラム編成権を奪われ、バックボーンまで削ぎ取られてしま

った」とが切った。形の上では、この全学的合意で来週中には一年四月がかりに学部の授業が完全復活となるわけだが、機動隊常駐は避けられぬ状況。このため学内的にも、すさまじい人間関係のキズはいえず、さらに今回の「要請行動」が取ることでの紛争の再燃は深まりつつである。

文学部の報告了承

東教大評議会

東京教育大学（宮島電機学長代行）は七日午前十時半から評議会を開き、「大文学部の正常化路線に協力すること」を決定した。六月夜の文学部教授会の討議結果に基づいて、入江勇起男同文学部長から報告を聞き、これを了承した。

文学部の授業の立案、当風の権限は当然の同課教授会の手を離れ、評議会に相談される授業実施委員が「直轄」することになる見通しである。

東京教育大で 来週から授業

評議会が決定

大文学部執行部が「文学部教授会への全面降伏」で正常化の道を歩み出した東京教育大は七日の評議会が、来週はじめを以て授業再開する方針を決めた。これに引き続いて、授業再開、入構（検問）方法、要請委員会等、文学部教授会の代表も参加して今後の具体的な計画をめぐり、一時間行われた。出陣されたのは、一年四半にわたる紛争発生以来三月来には卒業できるという。

なお、宮島電機学長代行は「入江入試中止、授業再開がないよう努力する。そのためにも、文学部教授会とのミソがなくなっていくことを希望する」と語った。

執行部が辞意

東教大文学部

「罷留の紛争に終止符をうつす、今月中旬から授業を再開する」となっている東京教育大文学部の執行部五人が八日の教授会、これからの学部の再建をめぐり協議を辞意することを申し出た。

授業再開を正式決定

東教大文学部「移転反対は変えない」

文学部の授業再開をめぐる火のついた。一方、文学部は「無条件降伏」を主張し、伏は授業再開に関わり、移転問題については従来の立場を変えない。ストップしていた東京教育大は、七日午前十時から評議会を開き、入江勇起男文学部長が「教授会の決定により、大文学部から要求があった授業再開のための四条件をすべて受け」と授業再開について無条件降伏を表明、評議会も、これを了承した。これにより、文学部の移転反対派（約六十人）全員が大文学部立案の文学部授業計画に参加し、今年四月から月ごとに授業が再開される。

このあと宮島電機学長代行は記者会見し「検問問題は、これで一応のヒリオドが打てた。しかし、これで文学部を新大文学部に譲渡するというのはない」と語

東教大文学部
部長ら辞任

一年四月がかりで授業再開のムドがついた東京教育大学文学部の入江勇起男文学部長、藤村文人、中野卓司評議員の三執行部は、八日午後開かれた教授会で辞意を表明、教授会は九日午前一時すぎこれを議めた。